日本ラグビー新聞

大野均のラグビー人生

一九七八年五月六日、福島県に大野均は生まれた。現在では身長一九六センチ、体重一〇五キロの巨体である。大野選手は大学からラグビーを始めた。彼の魅力は体格から想像できない軽いフットワークとスピード感にある。

大野選手のポジションはロック。二〇〇四年から二〇一六年まで日本代表選手として活躍した。試合出場回数は歴代最多の九八キャップ※。日本に貢献した得点は六五点である。ラグビーワールドカップには三回出場した。三十七歳の時にワールドカップで大金星をあげるなど日本ラグビーに多くの功績を残した。そんな大野選手も五月十八日に引退。十九年間に及ぶラグビー人生に幕を下ろした。

※キャップ…ラグビー界では試合数のこと。98キャップ＝98試合

ラグビー大野引退

代表最多のキャップ98

大野均

ラグビーのトップリーグ、東芝は18日、日本代表歴代最多キャップ98を持ち、ワールドカップ（W杯）3大会に出場した42歳のロック大野均が現役を引退すると発表した。22日に記者会見を開く。

福島県出身の大野は日大工学部でラグビーを始めて2001年に東芝入り。体を張った献身的なプレーが持ち味で04年に日本代表デビューした。自身3度目の出場となった15年W杯イングランド大会では強豪の南アフリカを破る金星に貢献した。最後の代表戦出場は現役だった16年6月のスコットランド戦だった。

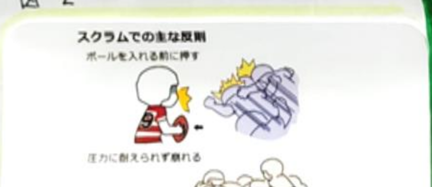
東芝には19年在籍し、トップリーグ3連覇などに輝いた。スーパーラグビーの日本チーム、サンウルブズでもプレーした。

2020 5月19日(火) 7面

図 1

前にパスすると「スローフォワード」、ボールを前に落とすと「ノックオン」、ボールキャリアが前にいる味方にぶつかると「アクシデンタルオフサイド」で相手ボールスクラム。

図 2



レフリーの「セット」のコールより先に組むと「アーリーエンゲージ」、ボールが入る前に押すと「アーリープッシュ」でフリーキック。故意に崩すと「コラプシング」、ボールが出る前にスクラムから離れる「ノーバインド」は相手のペナルティキック。

©J SPORTS

ラグビーの基本的なルール

ラグビーの試合は基本プレイヤー十五人で行い、交替は最大八名までできる。試合時間は前半四十分後半四十分の計八十分である。ハーフタイムは十五分以内。得点は主に、トライ五点、コンバージョンゴール二点、ペナルティーゴール三点である。ボールを持ったプレイヤーは相手をはねのけても体当たりしても良い。ボールは、必ず後ろか横にパスしなくてはならない。ボールを前に投げるのは、スローフォワード、ボールを前に落とすのはノックオンという反則になる。スローフォワードをしてしまうと、攻守交代で相手ボールからのスクラムで再開となる。後ろに落とすのはセーフ。

またボールを持ったら敵に囲まれる前に迷わず走らなければならない。

その他にも反則はたくさんあるが、基本的なルールは簡単なので、プレーする側でも、観戦する側でも楽しめるスポーツなのである。

鹿児島出身のラグビー選手

二〇一九年、日本中で巻き起こったラグビーブーム。その火付け役の一人に鹿児島県出身の選手がいる。中村亮土選手だ。中村選手は鹿児島実業高校出身で実はラグビーを始めたのは高校からだった。それまでは、サッカーをしており、キックが上手いのはサッカーの経験があるからといわれている。高校卒業後は帝京大学に進学。ポジションはSO（スタンドオフ）及びCTB（センター）である。一年生のときからチームで活躍し、四年生時には、キャプテンとしてチームを五連覇に導いた。また、同時期にUAE戦で日本代表として初出場を果たした。大学卒業後はサントリーに就職し、トップリーグサントリーサンゴリアスに所属。二〇一七年秋には「SOとCTBの両方ができる」と評価されジョセフヘッドコーチに日本代表に選出された。（日本代表キャップ数16回、W杯五試合）一七八cm、九二kgという鍛え上げられた外国人にも負けない身体からくり出されるタックルは中村選手の持ち味といえる。二〇一九年に開催されたラグビーW杯では一二番を背負った。この一二番はディフェンスのリーダー役をこなすポジションであり、それを勝ち取った中村選手はコーチからも「努力の天才だ」と認められるほどだ。世界で戦う鹿児島の選手の今後の活躍に期待し、これからも応援していきたい。

ラグビーW杯

一九八七年、各国間のテストマッチが中心だったため、一つの大会で王者を決めることはなかった。しかし、ラグビーの世界一を決める大会として記念すべき、第一回大会が、一九八七年に開催された。今では、「世界三大スポーツ大会」の一つに数えられるほどにまでなった、ラグビーW杯。

オリンピックと同じく、四年ごとに開催しており、誰も予想していなかった、イングランドが優勝した年以外、ニュージーランドが三回、オーストラリア、南アフリカが二回と優勝を独占。

第一回大会では、ニュージーランドが優勝し、日本は惨敗した。だが、第九回大会でベスト8に入り、日本でラグビーブームが巻き起こった。

次は、二〇二三年。優勝を目指してがんばってほしいと思う。